

令和4年度 國學院大學FD講演会 講演録

# ユニバーサルデザインの視点をいかした 高等教育における学びの支援

講師：阿部 利彦 氏  
星槎大学大学院  
教育実践研究科  
教授

※肩書き等は当時のものです

【主催】 國學院大學 教育開発推進機構

【日時】 令和4年12月21日(水) 17:00～18:30

【形態】 Zoomによるライブ講義形式で開催

もっと日本を。もっと世界へ。



國學院大學

## ユニバーサルデザインの視点をいかした高等教育における学びの支援

講師：阿部 利彦 氏（星槎大学大学院 教育実践研究科 教授）

※肩書き等は当時のものです

- 【対象】 本学専任教員・職員
  - 【日時】 令和4年12月21日（水）17:00～18:30
  - 【形態】 Zoomによるライブ講義形式で開催
  - 【参加者数】 76名（教員60名・職員16名）
- 

### 鈴木 崇義（司会）：

ただいまより、令和4年度國學院大學 FD 講演会を開催いたします。本日司会を務めます、教育開発推進機構の鈴木崇義でございます。どうぞよろしくお願ひいたします。

本学では、従来実施してきた障がいをもつ学生の学修支援や、あるいは今般のコロナ禍を契機とするオンライン授業の展開を通じて、さまざまな授業スタイルを模索してまいりました。本機構といたしましても、遠隔授業であるがゆえのコミュニケーションの難しさについて考えさせられるとともに、一方で、遠隔授業の利点を生かしたアクセスしやすい授業展開の在り方や、あるいは障がいを持つ・持たないにかかわらず、誰もがアクセスしやすい学びを提供すること、すなわち「ユニバーサルデザイン」という考え方についても、より認識を深めていく必要があるのではないかと、そのように考えております。

本学では、現在のところ、授業担当の先生方にシラバスの作成をお願いするにあたり、多様な学生がいるということ、いろいろな特徴・特質を持った学生がいるのだということを念頭に置いた執筆をしてくださるよう依頼を行っております。ただ、そうは言っても、授業形態あるいは授業運営に関して、具体的な考え方・方策というものは、なかなか見えてきづらい部分もあるのではないかと思います。

そこで、今回は、星槎大学大学院の阿部利彦先生をお招きして、困難を抱える学生に対して個別に対応や支援をするだけでなく、より包括的に、誰もが授業や各種の情報にアクセスできるようにすることを企図した「ユニバーサルデザイン」という考え方についてご講演をいただき、我々教職員が知見を共有して実践するための契機としたいと思います。よろしくお願ひいたします。

開催に先立ち、教育開発推進機構の石川則夫機構長よりご挨拶いただきたいと思います。先生、よろしくお願ひいたします。

### 石川 則夫（教育開発推進機構長）：

教育開発推進機構長を仰せつかっております、石川則夫と申します。所属は文学部日本文学学科でございます、日本文学の近代、新しいところを専攻しております。

本日は、阿部先生、本学の FD 講演会での講演をお引き受けいただきまして本当にあり

がとうございます。先ほど鈴木の方からお話したように、本学も、本当に多様な学生が集う場というふうになってまいりました。教員・職員の間でも、バリアフリーという考え方はもうかなり定着をして、そのような意識でもって仕事をしている状況になっています。

ただ、今日お話しいただくユニバーサルデザインということ、どのような形で意識化して仕事に生かしていくかということ、今日は勉強させていただきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

### **鈴木 崇義（司会）：**

続けて、今回の講師である阿部先生のプロフィールを簡単に紹介させていただきます。

阿部先生は、特別支援教育あるいは教育相談、学校カウンセリングをご専門に研究を進めていらっしゃいます。同時に、日本 UD 学会の理事でもあり、また多くのご著書を発表しておられますが、テーマを拝見いたしますと、やはり先ほどから出ておりますユニバーサルデザイン、あるいは学びの多様化といったテーマを多く扱っていらっしゃるようにお見受けします。

今回、ご講演で教育のユニバーサルデザインというのを大きなテーマとして、まず、教育におけるユニバーサルデザインの基本的な考え方について、また、担当する授業の中で教育のユニバーサルデザインの考え方に基づいた工夫として何ができるのか、あるいは、高等教育機関の教育におけるバリアとは何か等々、具体的なケースについてもお話ししたいと考えております。

長くなってしまいましたが、それでは講演をスタートしたいと思います。阿部先生、よろしくお願いいたします。

\* \* \* \* \*

### **〇はじめに**

先生方、こんばんは。今ご紹介いただきました、星槎大学大学院の阿部と申します。このような場にお声をかけていただいて、本当に光栄で、ありがたいなと思っております。

このところ、いろいろな大学からお声をかけていただいて、先週は東北大学というところでお話をさせていただいたのですが、このユニバーサルデザインの視点を取り入れた教育の在り方、あるいは授業のユニバーサルデザインということ、扱う分野というのは、歴史的には非常に浅いというか、学会や研究会などができて、しっかり研究として取り組まれるようになってから、まだ 14、5 年ほどしか経っておりません。

それから、今日これからお話しするのは、全てが正解というふうには思っていない、いろいろな大学の先生方と一緒に上げていく視点というか、考え方だと思っています。ですから、今日は質問もいただけるということなので、ぜひ、先生方からいろいろご意見をいただけたらありがたいなと思っております。

特別支援教育というか、この UD のお話を最初に大学でしたのが、恐らく昨年のことなので、昨年、筑波大学のダイバーシティ・アクセシビリティ・キャリアセンターというのがあるのですけれども、そこのお声かけをいただいて、これは公開講座で、オンラインでも配信させていただいたのですが、それをきっかけにいろいろなお声をか

けていただけるようになりました。

では、ちょっと画面共有をさせていただきます。今日、資料は大きめにつくってありますので見やすいかとは思いますが、ただ、全てお手元にお配りさせていただいているわけではないので、そのあたりは、適宜、確認しながら進めていきたいと思っております。では、よろしくお願いいたします。

まず、いろいろな大学にうかがった際に、率直なご意見として、「バリアフリーというのは聞いたことがあるけれど、ユニバーサルデザインというのはあまりなじみがない」というお声を、先生方からいただくことがございます。それから、「そもそもユニバーサルデザインって何だろう」というふうに、そこを確認したいというお声もありますので、今日はそこら辺から入っていきたくて思っております。

流れとしては、まず、ユニバーサルデザインというものはどういうものなのかという考え方の確認と、それから授業の中での視点について——各大学で授業評価アンケート、國學院大學のほうでもすばらしいアンケートの報告書を作成して公開されていますけれども、そういうものを手がかりとしながら——実は、授業の視点の中に、こういうユニバーサルデザインの視点というのはいっぱい含まれていますので、そのあたりを整理させていただこうかなと思っています。

そうして、ある程度、先生方の実践とつながったところで、改めて教育のユニバーサルデザインとは何なのかというのを整理させていただいて、最後に、ちょっとここら辺は個別支援になってくる、合理的配慮になってくると思うのですが、現在の大学生について、対話、たとえばグループで話し合ったり、演習に参加したりというところで困難を抱えている学生さんが増えてきておりますので、このあたりのお話をさせていただこうかと思っております。その後で、ぜひ、先生方、チャット等でもお声を出していただいて、ご質問いただければと思います。

## ○ユニバーサルデザインとは

まず、「ユニバーサルデザインとは」という、これを語るだけでも、私の授業ですと、1コマ90分ぐらい使う内容ですので、非常に縮めた、ダイジェスト版というふうにご理解いただければと思います。

ロナルド・メイスという名前を聞いたことがある先生はいらっしゃいますでしょうか。実は、このロナルド・メイスという人が、1985年に提唱した考え方が、ユニバーサルデザインというものです。お手元の資料にありますように【スライド4】、「年齢や能力、状況などにかかわらず、デザインの最初から、できるだけ多くの人が利用可能にすること」となります。

これは、たとえば、バリアフリーとの違いは何か。簡単に言うと、バリアフリーというのは、そもそもは健常者用につくったものについて、後から「バリア」を取る、ということですね。最初のデザインの段階、つくるときの想定においては、なるべく健常者、いわゆる定型発達の人をイメージしてつくられて、そこから何かバリア、すなわち障壁になるものを取り除くという考え方になります。それに対して、ユニバーサルデザインでは、最初から、より多くの人が使いやすいようにデザインしていくということが大きな違いです。

ここから、ちょっとお手元の資料にはない話になっていくのですが、先生方、それでは、ユニバーサルデザインといえば、身近なものの中から、具体物として何か思い浮かべられる

もの、「あれじゃないかな」と思われるものが何かありますでしょうか。「そう言われてみると、何がユニバーサルデザインなんだろうか？」というふうに思われる先生もいらっしゃると思います。

たとえば、本当に身近なものとしては、自動ドア、段差がない自動ドアですね。基本こういう自動ドアというのは、そもそも段差がないようにできていますので、これは車椅子の方でもスムーズに使うことができます。

あとは、水道の蛇口を考えてみてください。ひねらなくても、手を出したら水が出るタイプ。今のようにコロナ禍なんかだと、こういうのはありがたいですね。ちょっと國學院のキャンパスではどうなっているか分かりませんが、こうした蛇口は力が要らない、あるいは手をかざすだけでずっと水が出てくる。なめらかに使うことができます。

このように、もう日常の中に溶け込んでいるのですよね。ユニバーサルというのは、何も特別なことではなくて、日常の中にいろいろ溶け込んでおります。

オリンピックでも有名なピクトグラムというもの、ある意味ユニバーサルデザインと言えます。国を超えて、あるいは言葉に左右されない。漢字とか英語とか使わずに、何となく見るだけで「ここはトイレなんだな」とか、分かりやすくなっているのがピクトグラムです。

あとは、フォントですね。別に明朝体が悪いというわけではないのですけれども、たとえば、6と9、あるいは1と7は、非常に形が似通っています。今日スライドに使わせていただいているのが、UD教科書体、UDフォントです。これは、Windows10には搭載されていますが、ちょっとGoogleドキュメントには入っていないのですけれども、より多くの人が見やすいフォントとしてつくられています。大きな違いとしては、6と9の形が全く異なっていたり、1と7も分かりやすく表記されていて、これはいろいろな人が判別しやすいというフォントになっています。読みやすさ・見やすさということに配慮する、そういう視点も、言ってみればユニバーサルデザインである。このあたりは、先生方が資料をつくられたるときに活かすことができるのではないかなというふうに思っております。

次に、先生方、たぶん多くの先生方のご自宅にもあるものなのですが、これは何だか分かりますでしょうか。シャンプーのボトルの写真ですが、表面に何かギザギザがありますね。「あっ」と思われた先生もいらっしゃるし、「これ何だろうな」と思われる先生もいらっしゃると思うのですが。これは、花王さんが日本で初めてつくったのですが、基本的には視覚障がいの方が、シャンプーとリンスを判別しやすくなるための工夫としてこのようになっています。これもユニバーサルデザイン的な工夫ですね。これは1991年に開発されたのですけれども、だいぶ前ですよ。

そう考えてみると、もう1990年代にはこのようなデザインが取り入れられていたということになります。これは、ロナルド・メイスが1985年にUDの考え方を提唱してから少し時間差があって、日本にその視点が入ってきたのが1990年代ということになるわけですが、それまではそういうのがなかった。では、それまでは、各家庭、特に視覚障がいのある方のご家庭では、シャンプーとリンスを間違えなくするためにどんな工夫をされていたのかというところを、ちょっと先生方と一緒に考えてみたいと思うのですけれども。先生方、もしご家族で、もしかしたらご家族に視覚障がいの方がいらっしゃるかもしれないのですけれども、以前、そういうシャンプーとリンスのボトルの刻みがないときに、ご家族あるいは支援者はどんな工夫をしていたのか、イメージできますでしょうか。

これを学生に訊くと、「リンスインシャンプーを使えばいいんじゃない」みたいな意見が学部生から出て、なるほどなと思いますが、今日は基本的にシャンプーとリンス両方使わなければいけないというときの工夫ということでお話を進めたいと思います。

さて、実際にこのデザインになるまでにどのような工夫をしたかという、たとえば、点字で「シャンプー」とか「リンス」というものを刻印したテープを、それぞれのボトルに貼っておくという方法もありますね。といっても水場ですから、すぐに剥がれてしまうというような課題があるかもしれません。または、シャンプーかリンスかのどっちかのボトルに、輪ゴムを巻いておくという方法もあるかと思います。あるいは、今は 100 円均一でいろいろな容器が出ていますが、1990 年代というのはまだそういうのがなかったので大変だったかもしれないのですが、シャンプーとリンスのボトルの大きさを変える。容器を変えることによって分かりやすくする、という工夫がございました。

あるいは、場所を決めておく。たとえば右はシャンプー、左はリンスというふうに場所を固定して、家族の協力でそれを動かさないようにする、定位置を決めておくなんていう方法もありますが、これは各家庭やそれぞれの支援者が工夫していくということで、これはある意味で合理的配慮、個別の支援ということになります。

しかし、最初からこのような、ボトルに刻みをつけておくというような工夫があればどうでしょう。各家庭や支援者が個別に工夫をしなくても、最初からこうしたデザインがあることによって、いろいろな面で便利というか、安心が生まれてきますね。

このシャンプーボトルの刻みができてきたことによって、いろいろな感想があるのですが【スライド 6】、たとえば障がいのない方の感想としては、別に大げがはしなくても、シャンプーとリンスを間違えることがしばしばあるので、こういうデザインであればちょっと安心して使うことができるという意見があります。あるいは、ご家族が失明されて、このシャンプーの刻みが便利で、アイデアに感謝していると。また、障がいのない方であっても、我々だってシャワーを浴びながら手を伸ばしますので、シャンプーとリンスを間違えることはあります。私たち障がいのない人間にとっても、こういう工夫があれば、今後安心して使えるということもありますでしょう。

このように、障がいのない方と、障がいのある方やそのご家族と、両方から共通して、「使う人の立場になって考えられていて本当にいいですね」というご意見が寄せられているのですが、ここが大事になってきます。

最初にご紹介したユニバーサルデザインの定義を改めて振り返ってみてください。「年齢や能力、状況などにかかわらず、デザインの最初から、できるだけ多くの人が利用可能にすること」。先ほどは「デザインの最初から」というところを強調させていただいたのですが、ここでもう一つ、「できるだけ多くの人が利用可能にすること」が今のお話にあたります。障がいのあるなしにかかわらず、いろいろなひとが利用可能にすることです。しかも、利用する人の立場にたって考える。先ほどのシャンプーボトルについても「使う身になって考えられて本当にいい」という感想がありました。

ですから、教育・授業においても、我々は教える側ですけれども、学び手の視点に立って考えてみるということが、ユニバーサルデザインの発想を教育に盛り込むということの重要な視点になってくるかなというふうに思っております。

## ○ユニバーサルデザイン（UD）で大事なこと

それでは、ユニバーサルデザインとして大事なことは何かというお話に移ります。このあたりも、もしお時間があれば先生方にいろいろ考えていただければいいところなのですが、今日は1時間程度の講演ということですので。

まず、「安全・安心」。先ほども出てきましたが、安心して使えるということですね。

あるいは、「わかりやすい」。手をかざせば水が出るとか、自動ドアも別にマニュアルとか要りません。分かりやすくスムーズに使える。

あるいは、「ポイントがはっきりしている」。このあたりは後でお話しますが。

あと、「間違いが少なくなる」、ということも言えるかと思います。もちろん、学びの中では間違えるということも重要なのですけれども、間違いが少なくなるということも、ユニバーサルデザインの視点では非常に大事なかなと思っています。

そして、ここがポイントです。「さまざまな立場の人にとって」どうかということ、まさに「多様性」を視点に入れていくということですね。教育においても、さまざまな学生の視点、小中学校だったら児童・生徒の視点に立って、自分たちの授業を再検討してみるということが、ユニバーサルデザインという観点からは重要になってきます。

さて、ここまでお話しさせていただいても、でもまだちょっと「ユニバーサルデザインが教育とどうつながるのだろうか」というふうに思われるかも知れません。「確かに、学生の視点で考えてみるというのはイメージできるけれども、もうちょっと具体的にどういうことなんだろう」というふうに思われる先生方も、各大学でいらっしゃいます。

ユニバーサルデザインというのは、使う人の立場に立ったデザインであるということですから、教育におけるユニバーサルデザインというのは、学び手、学習者、学ぶ人の立場に立った教育をデザインしていくということになります。そういうデザインを検討するときには何が重要になってくるのか、それをここからお話しさせていただきたいと思います。

## ○学生はどこでつまづきやすいのか

実は今、大学において、精神障がいや発達障がいなど、さまざまな障がいをお持ちの学生さんが年々増えてきています。アメリカとかに比べると、まだ比率は非常に少ないのですが、高等教育段階においてもだんだんと増えてきていまして、もちろん肢体不自由の学生さんもいらっしゃいますけれども、精神障がいの方、発達障がいの方、あるいは聴覚障がいの方、視覚障がいの方、多様な障がいをお持ちの方が来るようになってきているのかなと思います。実際、このあたりは日本学生支援機構のほうでも発表がなされており、このような学生の数が、重複障がいの方もいらっしゃいますが、年々非常に増えてきているということが報告されています。

あるいは、先週発表された文部科学省の調査によれば、通常の学級に、知的な遅れはないのだけれども、学習面、それから対人関係面、あるいは行動面で、何らかの特別な配慮が必要な児童・生徒が8.8%いるという数字が発表されました。10年前は6.5%という数字だったのですが、大幅に増えて8.8%、以前は1クラスに1人か2人というふうに言われていたのですが、今はもう少し多い児童・生徒が学びに支援を必要とするようになってきている、そういう時代になっています。

たとえば、配付資料にちょっと挙げさせていただいたのですが、発達障がいのある学生さ

んの学びのつまずきとしてどのようなものがあるか【スライド9・10】。私の大学の学部生の中にも、そういう知的な遅れがない、あるいはIQが非常に高いのですけれども、発達障がいをお持ちの学生さんが何人かいらっしゃるのですけれども、見通しが持てないというか、計画を立てることについて困難があったりします。そのため、期日までにレポートが出せないとか、あるいは複数の科目のレポートが重なると、期日までに提出ができなくなってしまう、ということがあります。

私の経験でも、実際、非常に知的能力が高くて、既に先行研究の文献をいっぱい読んでいる、かなりの文献を読みこなしている学生さんがいて、これなら卒論大丈夫だと思っていたのですけれども、なかなかやはり時間配分がうまくいかないと言いますか、計画どおりに書き進めていくことができなくて、4年生で卒業できずにもう1年、半年延ばしたというケースがありました。これは私の支援の課題でもありましたけれども、そこでの反省も含めて、こんなふうに、見通しを持ったり、自分でペース配分を工夫したりというのが難しい学生さんもいらっしゃるということですね。

あとは、たとえば、今はパソコンを使っているので大丈夫だと思うのですが、話を聞きながらノートを取るのが困難であるとか、あるいは、ディスカッションでうまく対話ができないという学生さんも増えてきています。

あるいは、精神疾患をお持ちの学生さんですとか、やはり不安が強くて、特にグループで話し合ったりするのが非常に緊張するというので、場合によっては他の学生さんと分けて、私と1対1で話し合いをしたりというようなことも、実際、私もしておりますが、そのような対人緊張の強い学生さんとかも増えてきています。後ほどこの演習の工夫というのもお話しさせていただきますが、いろいろなこまり感を持った学生さんが増えてきています。

そこで次のスライドですが【スライド11】、私も教員としては、先生方も同じだと思うのですけれども、より多くの学生さん、さまざまなこまり感を持っている学生さん、もちろん上位層の学生さんもいらっしゃいますけれども、それぞれの学生さんが、我々の授業に参加してさまざまなことを感じたり、考えたり、気づいたりしてもらいたいなど。そして、たとえば15コマの授業の最初と最後で、その学生さんの中でいろいろな気づきが起きたり、問いが生まれたりしてほしい。あるいは、15コマの中の1コマ目の中、90分間の最初と最後で、たとえばユニバーサルデザインならユニバーサルデザインについての考え方を深めてほしい。そういうふうに、学生さんたちが変わってほしいと思うわけですね。そうした変化は、学生さん1人ひとりによって違うと思うのですが、100人なり300人なりの授業を受けることを通して、学生さん1人ひとりの学びが充実してくれればいいなと思っています。

そのために、私としてはユニバーサルデザインの視点を加えて、教育のユニバーサルデザインというのを検討し始めて、十数年経つところでございます。

## ○授業における工夫の視点 ～授業評価アンケートから～

それでは、どういう視点で授業を工夫していけばいいかということですが、実はもう学生による授業評価アンケートの中に、たくさんのヒントが隠されています。これは、各大学で実施されているような授業評価アンケート、まさに國學院大学のほうでも素晴らしい授業評価アンケートがありますので、そのあたりを含めて、お話をさせていただこうかなと思っ



ています。【スライド 12】

### ①視覚提示（視覚化）

まず、各大学の学生からの意見で多いのが、これは自由記述で寄せられることが多いのですけれども「スライドの文字が読みにくい（小さい）」。そもそも文科省のスライドなんていうのは、かなり文字が小さいなと思いますけれども。あるいは、「図・表などを見やすく、分かりやすくしてほしい」「口頭での説明が多かったので、その内容も資料に記載してほしい」というように、資料に関する学生の希望というのは、結構あるかなと思います。

そういうことで、幾つかの大学の評価アンケートの項目として、視覚提示についての内容を尋ねる、たとえば「A先生の板書やスライド・資料は読み取りやすいですか」なんていう質問を学生にチェックしてもらおうということがあるかなと思うのですね【スライド 13】。

これを我々は「視覚化」、見せ方の工夫と言っています。もちろん動画とかもありますし、どうやって ZOOM で、あるいは Google Classroom などを使いながら工夫していくかということになると思います。あるいは、Jam Board とか、ZOOM のホワイトボードの活用なども、視覚化の工夫になっていくと思うのですね。

資料作成の際の配慮としては【スライド 14】、文字の大きさを工夫するとか、フォント、先ほど鈴木先生からもお話がありました、本資料は UD デジタル教科書体を使わせていただいています。このフォントにしなければいけないということでは決してありません。

あるいは、色の工夫ですね。色覚に、色の分別に苦手さがある学生さんもたくさんいらっしゃいますので、このあたりのカラーユニバーサルデザインの考え方。あるいは視覚情報をどう配置していくか。図表の配置の仕方や、あるいは空欄をどういうふうに設けていくか、みたいなどころも、資料作成の際の工夫のポイントになってくるかなと思います。

実際に、今回、國學院大学のアンケート分析の報告書も参考にさせていただいたのですが、ここでも、問いとして「教員が提供した教材（スライド・レジュメなどの配付資料）は、理解の助けになりましたか」という設問がありますね。もちろん、教材の内容も大事になってくると思うのですけれども、この中には多分、それらの見せ方ということも含まれているのではないかと思います。

あるいは、動画も視覚化、見せ方の工夫が大切ですね。これについても、学生さんの自由記述など見ますと、動画は内容が明確で、プリント・課題は情報が豊富で知識が深まったというように、先生方の取り組みによって学生さんの満足感につながっているのではないかなと思います。このあたりも、視覚化、どう情報を提供していくかということが大事になってきますね。以上は、お手元のレジュメには含まれておりませんが、今回、こういう場をいただいたときに、改めて私たちのゼミでも、この資料を見させていただいて非常に学びを深めることができました。本当に感謝したいなと思っています。

このあたりの視覚化の工夫についてですが、実は、自閉スペクトラム症の方々の場合、たとえば有名人としてはビル・ゲイツとか、マーク・ザッカーバーグとか、スティーブ・ジョブズというのはご自身がカミングアウトされています。監督だと、スティーヴン・スピルバーグとか、いろいろな方がいらっしゃって、ただ日本でカミングアウトされている方はほとんどいらっしゃらないのですが、そういう自閉スペクトラム症の方々の特徴として、目で学ぶ人、ビジュアルラーナー、あるいは目で考える人、ビジュアルシンカーというふうに言わ

れることが多かったのですが、そういう方々にとっては、こういう視覚化ということは、大変重要になってきますよね。

また、そういう方々だけでなく、そもそも今の学生さんの多くは、やはりさまざまな視覚媒体で育ってきています。この頃は、2歳ぐらいからタブレットを使っているというご家庭、あるいは、ゲームをやることなどを通して、視覚優位の学生さんは増えてきていますので、そういう意味でも、この視覚的提示というのが、非常に重要な学びの手がかりになってくると思っています。

## ②ポイント（焦点化）

次のスライドです【スライド 15・16】。この辺も、厳しい意見なのですが、一般的な大学のアンケートを読ませていただくと、自由記述の中に「講義の重要なポイントがどこなのか分かりにくい」あるいは「資料が多すぎて重要な点が分かりにくい」というような意見を、学生からもらうことがあります。

そこで、各大学の授業評価アンケートの中に、こんな趣旨の設問が含まれているものがあります。各講義でのポイントが明確に示されていたか、ということですね。たとえば、説明が分かりやすかったですか、重要なポイントが明確化されていたか、テストに出るポイントが分かりやすかったですか、というような問いかけが、授業評価アンケートの中に含まれていることがあります。このように、ポイントを明確化する、ハイライトするということを、我々は「焦点化」と呼んでおります。

ただ、この焦点化ということも、すでに先生方は工夫されていらっしゃるのですよね、國學院の先生方も。こんなコメントがありました。「毎回の授業でやることが明確に記載されていた」。このあたり「何をやるか」というのも、まさに焦点化だと思っています。

## ③興味工夫

ちょっとスライドの展開が早くて申し訳ないのですが、次に行きます【スライド 17・18】。意欲的な学生さんほどいろいろな思いを持っているものですね。たとえば、次のポイントは、「身近な例などを積極的に取り入れてほしい」というような意見とか、「もうちょっと興味を引くような工夫をしてほしい」。我々も先生方も、工夫をしているつもりなのですがね。なかなかこのあたり、難しいなと感じることがあります。

ただ、やはり、各大学の授業評価アンケートを見ますと、学生に対して「あの先生の授業は、皆さん、学生さんにとって興味を引くような工夫をしていますか」みたいなことを質問項目に入れている大学もあります。このあたりの興味工夫ということも、非常に大事になってくるかなと思います。

今日はあまり時間がなくてお話できないのですが、インストラクショナルデザインにおいて、ジョン・ケラーの「ARCSモデル」というものがありまして、その中でも一番大事になってくるのが、A・R・C・Sの中のAです。つまり「注意喚起（Attention）」、学生の注意をどう喚起していくかということですね。授業の90分間、学生の注意をずっと喚起し続けるというのは、なかなか難しいかなと思うのですが、なるべく「面白そうだな」とか、「これはどういうことなんだろう」というように、学生たちがわくわくしたり、問いを持つような工夫が、少しでもできたらいいなというふうに考えています。

実際に、國學院の授業評価アンケートにも「この授業のテーマや、関連するテーマへの関心が高まりましたか」という問いが設定されていますけれども、このあたりは、まさに興味工夫につながってくる問いかけだろうと思います。それに対して学生さんたちの自由記述の中には、「例を挙げて細かく説明してくれたので、興味を持ちやすかった」。具体的な例を挙げて、ということだと思ふのですけれども、まさに先生方の実践はUD化されているというふうに思いました。あるいは「関連動画があつて興味がかなり広がった」というのもありますね。

先生方に改めて言うことではないと思ふのですが、「浅い学び」というのは、丸暗記、そのままひたすら暗記することだというふうによく言われています。それに対して、いろいろな既存の知識や経験がさまざまにつながっていくことを重視して、それで学びが広がっていく、そうした学びの接続ということが「深い学び」だというふうに言われています。「これはどうなんだろう」、「AがどうだったらBがどうだったんだろう」というふうに興味を持って問いかける、そしてそれが調べてみるということにつながるというのは、非常に大事な点です。ですから、こうした興味工夫というのもUD的な視点だと思います。

ここまでお話をさせていただいて、お聞きになった先生方は、視覚化も工夫しているし、焦点化も工夫しているし、何か学生たちが食いつくような興味工夫をスパイスとして入れているなという先生も、多くいらっしゃるのではないのでしょうか。

#### ④接続（つながり）

それから、次は、接続、毎時間のつながりということについてですね【スライド19】。

実は、我々、教師としては、それぞれの専門分野については頭の中でつながっているのですけれども、学生の中では新しく学ぶことなので、その接続、つながりが見えにくいことが多いのです。そうすると、学生からの希望としては、これは中学生、高校生にもあることですけれども、「毎時間のつながり、前時とのつながりとか、この後の授業にどうつながってくるかというのを分かりやすくしてほしい」。あるいは「授業内容と課題が繋がらない授業が何回かあった」みたいな意見は、國學院でもあると思ふのですけれども、各大学でもそういう意見が多く見られます。この接続、つながる、あるいは自分事にするというのは、我々教師がなるべく工夫したいことかなというふうに思っています。

先ほどのジョン・ケラーのARCSモデルには、今日全部はお伝えできないのですけれども、もう1つ、R、「関連づける（Relevance）」ということがあります。たとえば、私の大学院のゼミには、現職教員の方々が、これは小中学校の教員だけではなくて、看護の教員だったり、作業療法士養成課程の教員だったり、さまざまな分野の教員が来ているのですけれども、看護学でいうと、看護の授業というのは、各科目の内容が、もう、すぐに接続していかなければいけないのです。基礎看護学で学んだことが、たとえば高齢看護学につながっていきますし、そういうふうにもいろいろと接続していかなければいけない。でも、なかなか学生はそのスパイラルにつながりにくいので、どうやってそれを関連づけていくのか、ということが非常に重要になってきます。そういう意味で、國學院の授業評価アンケートの、この「毎回の授業内容が関連付けられて授業が進められていましたか」という設問も、まさに関連づける、接続すること、学びの接続ということを意識した問いが、しっかりと学生さんたちに投げかけられているんだなというふうに思いました。

## ⑤理解配慮・個別最適化

次のスライドです【スライド 20】。たとえば「時間がなくなってしまうな」と思ったりすると、話のスピードが早くなってしまうたりします。私も今日は、たぶん後半そうなるでしょうんじゃないかと思うのですが、また、これも今日、ちょっと反省しているのですが、次のスライドに移るのが早かったり。あるいは、学生からの声としては「ペース配分を工夫して欲しい」とか、「学生の理解度を確かめて欲しい」という意見も非常に多く挙げられます。このあたり 30 人とかの授業だったらまだいいのですが、100 人、200 人の授業になると、なかなか難しい。小テストを実施するとか、このあたりも先生方、工夫をされているんだというのは、アンケートの分析からも感じておりましたけれども、学生の理解度を確かめるというのは、非常に重要なポイントになっています。

次をご覧いただければと思うのですが【スライド 21】、つまり「理解配慮」ということで、これもいろいろな大学のアンケート項目に「この授業では、学生さんの理解度を確認しながら進められていますか」というようなことが訊かれている。学生の理解をそろえていくというのは非常に難しいと思いますが、まさにこのあたりが学び手の視点に立つということですから、ユニバーサルデザイン的な視点ということになるかなと思っています。

実際に、この学び手の視点でということと言いますと、今、我々も対面授業をやっております、うちの大学院では 4 期に分けて、2 コマずつ連続でやります。私の授業はたとえば「教育のユニバーサルデザイン特論」というのをやっているのですが、この後、12 月 25 日から大学院の授業の 4 期が始まりますが、対面でキャンパスに来るか、オンラインにするか、ハイブリットで選べる形になっていまして、そうなると、やはりオンライン授業の工夫もしなければいけません。

いろいろな工夫を先生方もされていると思うのですが、やはり、予習課題とか予習動画があることで、授業内容の理解がスムーズにできた。私もなるべく資料は 1 週間前に Google Classroom にアップして学生さんに見ておいていただくとか、あるいは、グループで話し合いをしてもらうのですが、その話し合ってもらった内容も事前に Google Classroom のほうに上げておいて、「こういう話し合いをするので、ちょっと考えを深めておいてください」というふうなことを事前に予告したりすることもあります。

あるいは、國學院の授業評価アンケートを参照してみますと、「発表のとき、事前に内容や日時を提示してくださったので計画が立てやすかった」という意見がありました。こういう「学生に見通しを持たせる」ということも、非常に大事になってくるなと思います。特にオンライン授業なんかの場合は、見通しを持たせるというのは非常に大事なことです。もちろん対面授業でもとても大事なポイントかなと思っています。

もう 1 つ、これはちょっとスライドにも上げさせていただいたのですが【スライド 22】、先生方の取り組みについて、「講義内容が課題・課題解説・それ以外で分けられ、受講生が選択できるのが良い」。学生の自己選択・自己決定を応援していく。あるいは「録画動画や課題提出フォームをまとめて提示いただいたので、自分のペースで進められた」。このあたりは文科省が言うところの、まさに個別最適化というものを先生方が推進してくださっているなど、この辺は、ユニバーサルデザイン的な配慮なのか、合理的配慮なのか、その中間に位置するのかな、なんていうふうに思っております。

さて、これは先生方のお手元の資料にも上げさせていただいているのですが【**スライド 23**】、ここまで先生方の工夫としては、まず既に学生さんに「見通し」を持たせる工夫をされていらっしゃるし、大事なポイントや項目を「焦点化」してくださってもいますし、それから「視覚化」の教材の工夫や動画の工夫、あるいは Google Classroom のようなところに動画や教材をアップして、もう 1 回見直して振り返ることができたり、というようなことも、たぶん先生方は工夫されているのではないかなと思います。

あるいは、今日はちょっとお話がまだできていないのですが、「共有化」の工夫、それから「興味関心」そして「個別最適化」というように、ユニバーサルデザインの的な授業の教育の工夫というのは、特別なことではなくて、今日ご参加の先生方も、もう既に実践されていることの中に、たくさん含まれています。ですから、新たに何かをしななければいけないということではなくて、むしろ、これまで既にやってきたことを、いかにバージョンアップさせていくのか、さらにどのように磨いていくのか、ということを考えたいと思うのですね。そして、そのときに、学生たちからの意見も取り入れながら工夫していくということができたらいいな、というふうに思っております。

ここまでのところで、各大学に見られる先生方による具体的な配慮として、どんなものがあるかという【**スライド 24**】、まず指示や課題の内容、試験の日程、予定変更などの重要な情報を資料や板書で視覚提示する。あるいは Google Classroom なんかにアップすることもあるかと思います。それから、口頭説明を文字資料として挿入したり、あるいは先生方が、これは私も難しいところですが、明瞭さを心がけて話すスピードに配慮したり、あるいは、学生側の聞こえの状況などを確認したり、そうしたことも実際にされているのではないのでしょうか。

さらには【**スライド 25**】、指示を出す際に曖昧な表現を避けて、明確に分かりやすい表現を使用したり、授業における何らかの学びのルールやマナーについて、言葉や文字で明確に伝えたり、話し合う時間のテーマや発言のためのルール、役割分担などを明確化するということもしてくださっているかと思っておりますし、たとえば小レポートを記入するタイミングなどの具体的な明示等々、このあたりの UD 的な視点は、何回も言わせていただいておりますが、やはり、もう既に、先生方の工夫の中に十分含まれていることなんだというのを、改めて整理をさせていただきました。

## ○授業 UD の 3 つの柱 ～視覚化・焦点化・共有化～

ということで、「なるほど、もう既にいろいろ実践しているのだな」と先生方には思っていたことと思うのですが、そこで、ここからは、先生方と共有しておきたい授業の工夫、ユニバーサルデザインの的な工夫に関して、改めて、いくつかのポイントに絞ってお話をさせていただきたいと思っております【**スライド 26**】。

なお、冒頭でお話させていただいたように、先生方に「このとおりしてください」ということでは決してありませんし、私はどちらかという特別支援教育とか教育相談の分野ですが、今日はいろいろな分野の先生がいらっしゃるかと思いますので、このあたりは、ご自分の授業の中で「これはやっているな」とか、あるいは「こういうのが取り入れられそう

だな」というのがあったら、参考にさせていただければと思います。

これまでもお話しさせていただいたことですが、1 つは「焦点化」。ポイントの明確化、あるいは授業で余計な部分をなるべくそぎ落としてポイントが際立つようにしていく工夫ですね。それから「視覚化」、今では、ビジュアルラーナー、ビジュアルシンカーの学生も増えていますので、視覚提示をどう工夫していくか。そして、せっかく多くの学生たちが同じ時間、学びの時間を共有するということがありますので、多様な見方、考え方を共有する「共有化」の視点。このあたりの共有化についても、今度お話するとなると 90 分ぐらい時間が必要になってきますので、ちょっとダイジェストとしてお話をさせていただこうと思っております。

### ①視覚化

まず、授業のユニバーサルデザインで大切なこととして、私が工夫しているのは「視覚化」、これは先ほどの興味工夫ということも含めますので、見せ方を工夫する、どう提示してみるかということです。ただ見せるだけ、視覚提示するだけではなくて、ちょっと見せ方を工夫してみるのですね。【スライド 27】

たとえば、先ほどのシャンプーのボトルの例で言いますと、そのボトルの一部分だけを見せ、「これは何だと思いますか、皆さんの日常の中にありますよ」というように。そんなことを学生に、大学生にしなければいけないのかと思われるかもしれないのですが、院生なんかもいろいろ考えてくれるんですね。ですから、こんなふうに視覚的に一部だけを見せるというように、いろいろと、見せ方の工夫をしたりしています。

あるいは、「この青い折れ線グラフは何を表しているか」というのを推測させたり、まるごと折れ線グラフを示すのではなくて、一部を隠して「この先どうなっていくか」を予測させたりする。そのような見せ方の工夫をしています。

もう 1 つ大事なのが、思考の「見える化」。これはたとえば、さまざまな思考ツール、Jam Board とか、あるいはホワイトボードなんていうのも含まれるかと思いますが、そうしたツールを使いながら、あるいは板書の工夫をしながら、見える化というものを工夫していけたらいいなと思っています。

### ②焦点化

次が「焦点化」ですが【スライド 28】、狙いを絞り込むということです。授業の 90 分、あるいは 15 コマの単元で、いろいろ教えたいことがあるわけですがけれども、特に看護・医療の分野だと国家試験などもありますので、どうしても教えなければいけないことがたくさんありますけれども、ある程度狙いを絞り込んでいくというのは非常に大事になってきます。

それから、やはり着眼点を明確にする。何を考えてほしいのか、何を深めてほしいのかという、そこの着眼点が明確になってくると、1 人ひとりの見方・考え方が膨らんできたり、あるいは、問いが生まれてきたりということがあるかと思います。

もう 1 つ、お手元の資料には入っていないのですが、この焦点化についての補足として、学生たちに「これなら問題解決できそうだ」「これなら理解できそうだ」という見通しを持たせるといっても、非常に大事になってきます。

すでに、見通しを持たせる工夫ということについては、先ほどの授業評価アンケートなどを見ても、学生さんから何らかの「見通しを持たたので安心だ」みたいな意見というのはたくさん出てきていましたので、このあたりも、「こういう資料が事前にアップされたりして、これなら問題解決できそうだな」「この資料があれば理解できそうだな」と。あるいは、「仲間がいれば、みんなで侃々諤々しながら深められそうだな」というような、そういうわくわく感というのも大事ですね。そうしたことも含めつつ、何を話し合えばいいのか、何を深めていけばいいのかという焦点化ということが、非常に重要ななと思っています。

さらに、もうひとつ注意しておきたい点についてですが、焦点化するためには、「ここ大事だよ」と言うだけではなくて、発問について意識する、問い方を工夫するということも、とても大事になってくるなと思います。次のスライドになりますが【スライド 29】、たとえば、「見えることを問う問い」。これは具体的な問いや、閉じた問いです。そして、「見えないことを問う問い」。より抽象度が高くなった、開かれた問いですね。この、見えることを問う問いと、見えないことを問う問いとをうまく組み合わせながら、学生たちが学習内容を自分事として捉えたり、既有的知識と経験や、ほかの学びで深まったものとなつがっていたりして、より学びが深まっていく。このように具体から抽象へと深まっていくということで、スライドではそれを下向きの矢印で表現していますが。

実は、学生たちは、具体から抽象に向かうときに、その段差でつまずきやすいので、そこをなめらかに接続できるような問いの工夫や、先ほど言ったような視覚的な工夫、思考の見える化というのも、非常に重要になってくるかなと思っています。

この発問についてですが、問いかけを工夫してみる、そんなこと考えたことなかったなという先生もいらっしゃるかもしれませんが、問い方というのは非常に重要になってくるなと思っています。この問い方の工夫も、焦点化につながるのです。

では、発問の目的によってどう使い分けるか【スライド 30】。たとえば、この問いは学生の既習知識を確認するため、理解のスタートラインをそろえるためのものか。学習へ動機づけるためのものか。あるいは、学習内容との個人的なつながりを見出す、自分事にするためにこちらが仕掛けた問いなのか。学生の思考を促すための問いなのか。あるいは、教員と学生間で、オンラインでありながら信頼関係を築くための問いということもあるかもしれません。また、問いかけることで学生間での学びを促すためであったり、学習の進み具合を評価するためであったり。あるいは、我々の授業が効果的に学生に届いているかどうかを評価するために問いかける、ということもあります。

このように、見えることを問う問い・見えないことを問う問い、オープンクエスチョン・クローズドクエスチョン、これらをうまく組み立てながら、このあたりも科目によって問い方が変わってくると思いますので、少なくとも我々は、そういう工夫もしながら、授業を検討しております。

また、学生さんたちがコロナ禍でも対面授業に来てくれたり、あるいはオンラインで集まったりしてくれる。もちろん、動画を見ての学びというものもあるとは思いますが、うちのほうでは、基本的には動画を見てという授業ではなく、毎回、対面式でやったり、オンラインでやっていますので、せっかくみんなで学び合うわけですから、知識や見方・考え方を共有して、あるいは具体から抽象に、みんなで協力しながら学びが深められたらいいなと思っています。アクティブラーニングをしたり、主体的・対話的で深い学び、あるいは協働的な

学びによってその視点が共有できて、せっかくみんなで学ぶのであれば多様な考え方を共有して、視点を広げていけるといいなというふうに思っているわけですね。

### ③共有化

今日は、ちょっと「共有化」の話はあまり詳しくできないのですが、ただし、この共有化については、演習とかグループで話し合うということの困難さということがありますので、最後に、このところを少しお話しさせていただきたいと思います。**【スライド 31】**

もともと、小・中学校、高校あたりからこの授業のユニバーサルデザインの視点が徐々に広がってきたのが、先ほど言ったように、14年くらい前からのことです。ちょうどこの2016～17年あたりで、この文献、「大学のアクティブラーニング型授業に対応したユニバーサルデザイン環境に関する一考察」という、原田新先生らがまとめられた文献があるのですけれども、このあたりから少しずつ、高等教育や大学での学びのユニバーサルデザインという視点が少しずつ増えてきたかなと思います。そこで、この文献から、幾つかちょっと紹介させていただこうと思うのですが。**【スライド 32】**

実は、今、対人関係上の苦手さがあつたり、曖昧な指示・質問に対する回答が難しい学生さん。あるいは、聴覚情報への苦手さ。これは、聴覚障がいの方だけではなくて、音に敏感だったり、ざわざわした中で先生の話に注意が向けられなかったり、あるいは、柔軟な対応が苦手だったり、臨機応変な行動が難しかったり、ということも含まれます。それから、見通しがないと不安になったり、混乱したりする学生さん。この聴覚情報ということであると、ざわつきの苦手さともつながってきますが。最近では、そういう学生さんが、大学に在籍するようになってきて、ということが整理されています。

それらの学生さんについて、どんなこまり感があるかという**【スライド 33・34】**、自分の意見や感想を述べるのができないとか、自分からペアやグループをつくるのができない。あるいは、ほかの学生の前で発表することができない。相手の問いの意図を酌み取って求められた答えを述べるのができない。それから、テーマの本質に関わる質問をすることができないとか、議論の流れを無視して自分の関心にこだわって質問してしまうとか。他人の質問を遮って自分の意見を話してしまう、というように、さまざまな演習やグループでの学びで困難を抱えている学生さんが増えてきているなどというのは、ちょうど東北大学でも、そんな話が出ておりました。

そこで、これに対して、どんな工夫があるか。これは、もし興味があつたら原田先生の文献を見ていただければと思うのですが、我々のほうでも、すごく似たような取り組みをしておりますので、ちょっと幾つかご紹介させていただきます。全部の対応は時間の関係でご紹介できないので、いくつかの例としてお聞きいただければ幸いです。**【スライド 35・36・37】**

たとえば、知識はあつたとしても、つまり豊富な知識は持っているのだけれども、「どう思う」とか「何か気がついたことあるかな」というふうに聞かれると、そういう漠然とした、見えないことを問う問いには答えにくいとか。あるいは、作業や課題の指示に曖昧な部分があると、どうしたらいいか分からなくなるというような学生さんがいます。これに対しては、先ほどお話しした問い方の工夫、具体的な問い方の工夫をするとか、あるいは、何をどうすればいいのかということをしできるだけ具体的に、曖昧な指示ではなくて、明確な指示を伝えるということが大事になってきます。



次に、グループでの話し合いの際に、急に話を振られると、もう頭が真っ白になってしまって答えられないとか、グループ活動の中で何らかの作業をするように指示されても適切に行動できないということがある。これは、たとえば事前に、グループ内で行う作業の役割分担を明確にして、「次回のときはこういう話し合いをして、何々さんにはこうしてもらおう」というふうに見通しを持たせてみたり、あるいは、「次回はこういう話し合いをするから、事前に準備しておきなさい」というようなことを伝えることで、こういう学生さんたちが参加しやすくなるということもあるかなと思います。こういうことは、既におやりになっている先生方も、結構いらっしゃるのではないのでしょうか。

あとは、主に講義形式の授業において、突然グループ作業をするように指示されると混乱してしまう。また、いつグループ作業が始まるのかと不安になって授業に集中できなくなる、というようなことがあるので、初回の授業で、授業の全体的な進め方や流れについて、スケジュールを具体的に教えておく。このあたりも、既に先生方はやっていたらいいですね。それから、毎回の授業の開始時に、その日の授業の進め方や流れについてのスケジュールを具体的に教えるなんていう方法によって、そういう不安のある学生さん、このあたりは精神疾患の学生さんかも非常に助かると思うのですが、このように、見通しを持たせる工夫というのは大事になってきます。

これらの工夫は、実は、発達障がいや精神障がいのある学生さんだけではなくて、より多くの学生さんにとっても、学びの見通しが持ちやすいので、安心して授業に参加できるということにつながっていきます。だから、合理的配慮、個別の配慮の話だなと思われるかもしれないのですが、ほんとうは、それだけではない。より多くの学生さんたちにとっても、このあたりの工夫というのは重要になってくるかなというふうに思っております。

## 〇おわりに

看護教員とか、作業療法養成課程の教員とか、あるいは各大学の先生方と、いろいろこの教育のユニバーサルデザインについて深めていく中で考えることですが【スライド 38】、小・中学生も、高校生も、大学生にも、「間違っははいけない」というバリアがあるんですね。あるいは「人と違ったら恥ずかしい」というバリアがあります。そういうさまざまな学習の先入観やバリアがあるので、これに対してどのようにして、たとえばグループワークなどで安心して自分の意見を示すことができる場のできるのかなということを考えていくことも、我々教員としては非常に重要なことだろうと思います。より多くの学生たちが、安心して学べるような、そういう学びの場をつくっていただければいいなというふうに考えております。

改めて、私が大事にしていることは、より多くの学生にとって、分かりやすく、学びやすく、教育のデザインとは何なのかというのを追求し、目指していきたい。それは、学生たちからいろいろ声を聞いたり、あるいは、いろいろな教える立場の先生方と一緒に深めたりしながらですね。多分、これも最終的・決定的な答えというものがあるわけではないと思うので、これからもずっと大学教員でいる限りは、残り数年の私の教員生活ですけれども、そこでずっと問い続けていく、問いに返答し続けていくのかなというふうに思っていますし、また、これを次世代の先生方にもバトンタッチできたらいいなというふうに考えております。

最後になりますが、もう既に何回も言わせていただいておりますが、こちらの先生方の授業

の工夫というのは、学生たちに安心感を届け、また意欲を届けてもいるのだなと思いました。スライドに掲げました、國學院の授業評価アンケートの分析報告から、先生方に対する学生さんたちのコメントをちょっと読ませていただきます【スライド40】。

「わかりやすい授業で、受けるのが楽しい」という声が既にあります。それから、「毎回の課題で理解が深まった」「質問にも丁寧に対応してくれた」「チャット機能を有効に使い、先生との距離が近かったために、質問しやすかった」。これは本当に大事ですね。それから、「質問や感想、課題に対してのフィードバックを毎授業しっかり行ってくれる」「先生が説明に対して具体例や」——多分、自分事にするような具体例や——「補足を入れ、理解を深めようとしてくれた」。これらは、私が大事にしている教育のユニバーサルデザインと、まさにつながるコメントだなというふうに思います。先生方がいかに工夫されているかというのは、非常に感じ取ることができました。今日、こういう機会を頂いて、それによってこの分析報告を読ませていただいたということが、私にとって、さらにいろいろな発見、学びになりました。本当にありがとうございました。

最後に、これは井上ひさしさんの言葉ですけれども。【スライド41】

私は、「むずかしいこと」をいろいろ伝えていかなければいけないので、それを「やさしく」と。それは、いろいろな捉え方があると思うのですけれども「やさしく」。そして、けれども「やさしいことをふかく」。「ふかいこと」を、さきほどの話でも楽しいというのがありましたけれども、「ふかいことをおもしろく」学び、学生たち、院生さんたちと学んでいきたいいなと思っていますし、そのための手がかりが教育のユニバーサルデザインの中にあるのではないかなというふうに思っています。授業づくりを楽しむということも、研究も楽しめますけれども、授業を楽しむということも、これからまた、続けていきたいなというふうに思っております。

先生方、お忙しいところ今日をご参加いただきましてありがとうございます。これで私の話を終わらせていただきます。

\* \* \* \* \*

## ■質疑応答

**鈴木 崇義（司会）：**

阿部先生、どうもありがとうございました。本学の「授業評価アンケート」も活用していただくなど、本学の教員にとっても身近に受け止めやすい内容にさせていただけたのかなと思います。それでは、さっそく質疑応答に入りたいかと思います。ご質問のある方は、ZOOMの挙手機能を使っていただいて、手を挙げていただきましたら私が指名いたしますので、したらマイクをオンにして、また可能であればカメラもつけてご発言をお願いいたします。

**阿部 利彦（講師）：**

先生、チャットとか使っていただいてもよいですね。

**鈴木（司会）：**

そうですね。もしマイクでの発言が難しいようであれば、チャットに書き込んでいただければ、それを私が読み上げるという形でも大丈夫です。質疑応答もユニバーサルデザインということできたいと思います。

すみません。いかがでしょうか。どうぞ、せっかくの機会でございますので。

**東海林 孝一（学修支援センター長）：**

経済学部の東海林でございます。同時に、本学の学修支援センターで、障がい学生の支援を担当しております。本日は大変いいお話を、ありがとうございました。

うかがったお話の中で、今後、来年度以降について、私どもも幾つかヒントを得ることができています。というのは、授業評価アンケートの項目です。こういうアンケートで、学生たちの声、学生たちの意見を拾いやすいように、その項目を構成していくということが、非常に重要だということが分かったのですけれども、そういうサンプルというのは、幾つか、学会等で共有されているのでしょうか。

**阿部（講師）：**

実は、こういうアンケート結果というものは、本当に私が手作業で、いろいろと呼んでいただいた大学ごとに公開しているものを、あるいは一般には公開されていない大学もあるんですが、それらの中から少し抽象度を高めて整理させていただいています。ですから、まとまった形で出ているというのは、なかなかなくてですね。だから、今回、國學院のほうで公開していただいているのはありがたかったです。

各大学に呼んでいただいたときに、事前に「大学独自で授業評価アンケートがあったら提供いただけますか」と伺ってみても、ちょっとそれも難しいですという大学さんもあるものですから、そこら辺が本当に今回、ありがたかったなと思うのですけれども。まだそこまで詳細には集められていない、というのが現状でございます。

**鈴木（司会）：**

司会からで恐縮ですが、私も1つ伺ってよろしいでしょうか。先生、ちょっと、もう少しお話いただけたらと思っていたのは、「共有化」という点についてです。私も障がい学生支援等の学修支援も担当しているのですが、たとえば演習などで、どうしても発表ができないという学生さんもいらっしゃるんですね。でも、やはり演習ですから、何らかの形で発表するとか資料をつくる授業ということなので、授業担当の先生方は、それぞれ個別に工夫をなさっているわけです。たとえば、その学生さんについては個別に、先生の研究室で発表といいますか、マンツーマンでやってもらったり、そういったふうに対応していただいているのですが。それで、今回、ユニバーサルデザインというテーマがありますので、そうした視点から、何かしら先生がご存じの事例ですとか、こういった形でやってみたらできたよ、というようなことがありましたら、ご紹介いただけたらなと思うのですけれども。

**阿部（講師）：**

いろいろなタイプの学生さんがいらっしゃるし、先生方もお忙しいと思いますので、なかなか、この通りにはできないかと思うのですが、私が実際に学部生に対応した例をご紹介します

せていただこうと思います。

事前に発表の練習を、これは対面あるいはオンライン両方なのですけれども、実際にそういう時間を設けてやってみたということがありました。発表する場合に、いきなりではなく、リハーサルがあると結構安心してできるという学生さんもおまして。そうして、発表資料のほうも見直して、こういうふうにしたほうがいいよ、とかですね。それから、たとえば授業にもよるかと思うのですけれども、5分以内で発表というような時間の制約などもあると思いますので、そのあたりの時間と資料のバランスも、学生さんによっては、焦点化できなくてたくさんつくってくる学生もいますので、そこら辺の調節をしたりもします。リハーサルをしてから、もう1回資料をつくり直そうか、となる学生さんもいますし。

あとは、オンラインなんかの場合、どうしても時間がオーバーしてしまう学生さんがいたのですね。それで緊張したりもするので、そこで代替案として、5分間で動画をつくって、それを流すということをしたこともあります。つまり、発表を事前に動画で作って、それを流すということで対応するというケース、そういうこともありました。

あとは、さっき言ったようにグループでの話し合いが難しいというような場合も、その話し合いの内容があまりにも抽象的だと参加できないけれども、より具体的な身近なことであればできる、ということもあります。たとえば、「自分の身近にあるユニバーサルデザインのものを調べてきて、それについて何かコメントする」くらいであればできるけれども、「ユニバーサルデザインとバリアフリーの違いについて話し合おう」みたいになると、それはちょっと分かりにくいという学生さんもいます。そういうときは、少しずつ抽象度を高めていくことで、少しずつ話し合いに参加しやすくなるようにするという、スモールステップで話し合いの場を設計していくというような方法もあるかなと思います。

いろいろな対応の仕方があると思うのですけれども、この辺も先生方のご事情によって、できること、できないことあるかなと思います。いかがでしょうか。

#### **鈴木（司会）：**

ありがとうございます。そうですね、段階的に、少しずつステップアップできるところまで、どこまで落とし込めるかという点がポイントかなというふうに感じました。

すみません。私が質問している間に、チャットに1点質問が寄せられましたので、こちらちょっと読み上げます。

「私自身は教員ではないのですが、教材や授業内容の焦点化について、ポイント等を的確に示すということになると、学生自身が思考することがなく、答えを教えていることになるのではないかと感じる先生方もいらっしゃるのではないかと思います。その辺のさじ加減を阿部先生、どのようにお考えでしょうか」

ということですが、いかがでしょうか。

#### **阿部（講師）：**

そうですね。たびたびで申し訳ないですけれども、たとえば私の授業の話をさせていただくと、「ユニバーサルデザインとバリアフリーの相違点と共通点をみんなで検討する」という話し合いの場面があります。ここで、最初から「ユニバーサルデザインとバリアフリーの共通点と相違点はこれだよ」と教えるのは焦点化ではないのですね。

この場合、焦点化というのは、まずユニバーサルデザインの定義とか、その見方・考え方を教える。また、バリアフリーというものの見方・考え方とか、その定義を教える。そこは焦点化しておかないと、ユニバーサルデザインもバリアフリーもよく分かっていないのに話し合いをしたら、そもそも自分の考え方が出てこないですね。

ですから、何を焦点化するのかということ、1つは、きちんとその定義であるとか、捉え方をまず提示して、その上で、両者の差異を比較して検討するといったことは、そこはもう学生さんたち自身に考えてもらうということですね。そういう、「教えること」と「考えさせること」との明確化。そこがやはり教育、教師としてすごく大事になってくると思います。

準備できていないのにいきなり「考えてごらん」と言っても、学生たちは考える材料がなかったら深まらないので、そこですね。まず、学生がどこまで知識を持っているかとか、どこまで定義を押さえられているかというところをしっかりと踏まえた上で、それから学生たちに投げかけていく。そうしないと、結局この「視覚化」「焦点化」「共有化」ということが何を目指しているかということ、「学生1人ひとりが問いを持つこと」を掲げているわけです。そのテーマについて問いを持ってもらうこと、リサーチクエストを持ってもらうということが大事になってくるので、「答えを教える」わけではないです。

非常に重要な質問をいただいたので、そこはやはり、なかなか今日お伝えしきれなかった部分がありますが、非常にありがたい質問をいただきました。焦点化というのは、答えを教えることとは異なるということです。どうもありがとうございます。

それから、付け加えて申し上げますと、意外と、非常に成績がいい学生さんでも、こちらが「知っているはずだ」と思っていたことを、実は知らないということが結構ありまして、いろいろな分野について。ですから、そういう前提となる部分については、「知っているはず」などとは思わずに、まずはそこから入って焦点化していかないと、やはり学びが深まっていかないとあるのかなと思います。そのあたり、先ほどお話しした「理解度を確かめる」というところにもつながってくるのかなと思います。

#### **鈴木（司会）：**

ありがとうございます。質問者の方からも、御礼がチャットに入っております。「ありがとうございます。私は、先生方に対して、授業に関する配慮支援をお願いする立場ですので、先生方がこうした配慮支援について、あるいはユニバーサルデザインというものについて、どういう印象をお持ちなのかなということを考えながら仕事をしています」ということでございます。

#### **阿部（講師）：**

ありがとうございます。

#### **鈴木（司会）：**

たびたび司会からで恐縮ですが。

本学では、教員に向けて、シラバスの執筆依頼がちょうど発送されたところでございまして、やはりシラバスに、要は、この授業がこういう内容なんだというのをできるかぎり明確に記述してほしいというようなことでお願いをしているのですが。

それでたとえば、これは一概に言えない部分もあるとは思いますが、どういった点に注意をして書いていけばよいか。つまり、授業の内容というよりも、むしろ全体的な進め方についてですか、そういったことについては、どのような点に注意して書いていったらよろしいでしょうか。本日は教員の方がたくさんいらっしゃっていますので、そういったこともちょっとお話いただければと思うのですが、いかがでしょうか。

#### **阿部（講師）：**

そうですね。シラバスとかの書き方については、それぞれ、先生方のそれぞれのお考えがあるかと思うのですが、フォントとか、文字の大きさとか、行間を空けるとか、そういう資料の見やすさということが挙げられるでしょうか。あとは、できれば 15 コマの個々の授業が相互にどうつながってくるかということ、どこに向かって学びを深めていけばいいかというようなところが、少し明確になると。学生の「学びの見通し」みたいなのが入るといいかなと思いますけれども。もちろんそのあたりは、最終的には先生方それぞれのご専門による部分があると思いますので、しかも分かりやすく書かれていらっしゃると思うので。

ただ、これはシラバスに入れるかどうかは分からないのですが、うちの場合、特に私の授業では、必ず話し合いをさせるので、「この授業では必ず、毎回ではないけれども、話し合いの時間がありますので、事前にそういう発表とか対話に対して支援が、あるいは支援とまでは言わないですが、こまり感なりある人は、事前に申し出てください」というふうなことは伝えます。うちにも支援センターはあるのですが、私はそもそも、それが専門ですから、少なくともそういう形で、履修する学生さんに、事前に。これは、視覚障がいの方もそうですね。視覚障がいの学生とか、聴覚障がいの学生さんもいらっしゃいますので、そうしたことで「何か迷われている方がいたらご連絡ください」といったことはあります。

#### **原田 佳昌（教育開発推進機構事務課次長）：**

教育開発推進機構事務課の原田と申します。阿部先生、今日は貴重なお話、どうもありがとうございました。1 点ご質問させていただきます。ちょっとややこしい質問かもしれませんが、

にわか勉強で申し訳ないのですが、このユニバーサルデザインは 7 つの原則というものがどうもあるようで、その中の 1 つに、適度な空間といたらよろしいのでしょうか、ある程度の空間を保つことが必要だということがありました。

授業において、たとえば最近、アクティブラーニングが多く授業で行われているのですが、先ほど先生からのご説明があったように、多様な学生がいて、そういったときに、各授業の中において先生方が学生との意見の交換ですとか、意見を述べさせるということについての難しさがあると思います。そういった場合、空間的なこと、空間の取り方というようなことについては、どのようなことを考えていけばいいのでしょうか。

あるいは、今、ハイフレックス、あるいはハイブリッドという形で、教室で授業を受けながら、遠隔で授業を受けているということがあるわけですが、そういうオンライン、いわゆるサイバー空間といたらよろしいのでしょうか、そういった中での空間の取り方というのはどうでしょうか、公平に授業が受けられるよう工夫することが、今までできてきているのか、それとも、何らかの困難があって難しいのか、そういった課題点を教えていただければ幸いです。どうぞよろしくお願いたします。

**阿部（講師）：**

ありがとうございます。すぐくまた大事なご質問をいただいて、ありがとうございます。

これ、実際、本当に精神疾患の学生さんいらっしゃいますし、自閉スペクトラム症の方もいらっしゃるのですけれども、1人ひとりパーソナルスペースというのが違いますので、このあたりの距離感は難しいです。近づき過ぎてしまう学生さんもあるし、逆に、非常に距離を取らないといけない学生さんもいるのです。これは1人ひとりオリジナルというか、まちまちです。どこまで対応するかは別として、もし、そういうことを配慮するのであれば、実際に学生さんと一緒に検討していかないと、なかなかこちらで想定して距離を計るみたいなことはかなり難しいかなと思います。実際に空間を共有して、対面型のときには、非常にこのあたりの感じ取り方が違いますので、オーダーメードで考えていかなければいけないです。

それで実際のところ、期待したように、学生さんの希望どおりにできるかという、やはり限界がありますので、そのあたりも含めて、検討するのであれば、「もしかしたら全部のご希望には添えないかもしれないけれども、その視点で考えてみたい」ということの投げかけは必要になってくるかなと思います。

今回のようにオンラインですと、たとえばZOOMだと、全員がスピーカーをミュートすればいいのですけれども、たとえばギャラリービューだと、全員が同じところに並んで、みんな距離が近いというか。それを皆さん真正面で見ますから、それが圧になる学生さんもあるのですね。そうすると、なかなか厳しいという学生さんもあるし。

このあたり、バーチャルだから安心感があるかという、もう「家にまで教師が来る」みたいな、精神疾患の方なんか「侵入されてきてしまう」みたいな不安もあるので、カメラオンがいいのか、オフがいいのかとか、そこら辺も本当に1人ひとり違う。そこまで追求していくと、かなり難しいところがあるかなと思うのですけれども。

非常に大事なご指摘ではあるなというふうに思いました。これという答えがなくて申し訳ないのですけれども、以上です。

**鈴木（司会）：**

ありがとうございます。続いて、教務部長からもご質問があるとのことで、宜しくお願いいたします。

**山田 佳弘（教務部長）**

阿部先生、本日はいろいろと勉強になるお話をいただきましてありがとうございます。本学の教務部長を務めております山田と申します。

私から1つ、先生のお考えをお聞かせいただきたいのですが、本日、さまざまな内容だったので、障がい名がつかなくても、ちょっと気になる学生というふうに表示すればいいのでしょうか、授業をやっていると、ちょっと他の人とは違うなというタイプの学生が、やはり本学にも存在しております。その学生にも、何とか授業を受けてもらって単位が出せるように、現実には配慮を、我々はやっているわけなのですが。

ただ、そういう時に、授業というのはその学生1人のための授業ではないわけで、そのほ

かにも一緒に、普通に授業を受けている多数の学生がいるわけですね。そういった普通の学生との間での公平性と言えいいのでしょうか、接する授業の中での公平性という点を、私自身は、やはりすごく気にしているところがあるのです。

先生のご体験から結構なのですが、気になる学生だけではなく、もちろんその学生もいるのだけれど、同じ教室の中にいる他の一般の学生への配慮、ケア、そういった点について、何か気をつけている点がございましたらお聞かせいただきたいのですが、いかがでしょうか。

### 阿部（講師）：

これも、とても大事な、難しいご質問をいただきまして、ありがとうございます。

1つは、やはりUDとか、支援には、合理的配慮も含めて、限界はございますので、なかなかさっきも言ったように、全部の学生さんの希望に対して、全てお応えすることもできないですし、やはり「納得いかない」という学生さんも出てきてしまいます。結局、我々も1人で100人とかの学生を見なければいけないこともありますので、どうしても限界というのはあります。

たとえば、さっき言ったフォントを変えるとか、見やすくするとか、事前に資料をアップしておくとか、そのぐらいはできるかもしれないのですが、本当に、さっき個別最適化というお話をさせていただいたのですが、究極の個別最適化というのは、もう授業ではなくて、1対1の個別指導になってしまうわけですね。このあたり、まずは、学生さんへの支援というのは全部にはなかなか応えられないということがあります。

あとは、やはり診断がついている学生さんは、何を要望すればいいかという点が明確なので、自己理解ができているのですけれども、そうでない、何かやはり支援が必要だけれども、今までそういう支援を得てこなかった学生さんというのは自己理解ができていませんので、たとえば先生のせいにするとか、周りの学生のせいにするみたいなことも起こりがちです。こちらから「こういう支援があるよ」と言うけれども、「私は要りません、不要です」みたいな、逆に我々の支援を拒む学生さんもいらっしゃいますので、このあたりはかなり難しいですね。私たちも、その学生さんだけ支援するわけではないので、ほかに何人もいらっしゃいますので、そこら辺の、どこまで支援できるのか、あるいは、どこができないか、みたいなところは、限界をある意味明確にして、関わっていくしかないかなと思いますし。

あとは、大学生ぐらいになると、そういう不満をなかなか上げてこなくて、最後に15コマ終わったところで、それこそ最後の授業評価の自由記述のところで不満が出たりすることもあります。このあたり、どうやって授業の途中ででも、「ちょっと、あのことが引っかかった」みたいな声を上げてもらえるかということで、このあたり、たとえば毎回のリフレクションシートのようなことも、それぞれ各大学でやっているかと思うので、目安箱ではないのですけれども、学生から気軽に、たとえば「急に声を出す学生がいて気になる」とか、そういうのがあったら挙げられるようにしていくというのが、まず考えられることですね。

障がいのある学生さんの声を拾うだけではなくて、そういう周りの学生さんのいろいろな声に対してもアンテナを高くしていきたいというふうには、まさにそういうふうに乗っております。ここも、スパッと言えなくて申し訳ないのですけれども、私たちとしても、これからも、また何かよい知恵があったら、ぜひ先生方に教えていただければと思います。以上です。



**鈴木（司会）：**

どうもありがとうございました。

そろそろお時間となりました。本日は、「ユニバーサルデザインの視点を生かした高等教育における学びの支援」ということで、阿部利彦先生にご講演をいただきました。今年度の國學院大學のFD講演会は、以上をもって結びとさせていただきたいかと思います。

阿部先生、どうも本当にありがとうございました。

**阿部（講師）：**

ありがとうございました。先生方、遅くまでありがとうございました。

〈了〉

ユニバーサルデザインの視点をいかした高等教育における  
学びの支援

星槎大学大学院 教育実践研究科  
日本授業UD学会理事

阿部 利彦

1

ユニバーサルデザイン？  
馴染みがないな



2

そもそも  
ユニバーサルデザイン  
って何だろう？



3

## ユニバーサルデザイン

- ユニバーサルデザインという概念は、ロナルド・メイス (Ronald Mace 通称 Ron Mace)により、1985年に公式に提唱されたもの
- 年齢や能力、状況などにかかわらず、デザインの最初から、できるだけ多くの人が利用可能にすること

4

## 視覚障害の方への調査

このデザインになるまで、どのような工夫をしていたか？

5

## このデザインについての感想

### 【障害のない方の感想】

- 間違えたことがあり、今後安心して使える。

### 【障害のある方の感想】

- 主人が数年前に失明。シャンプーのきざみが便利。アイデアに感謝。

### 【共通して見られた感想】

- 使う身になって考えられていて本当によい。

6

ユニバーサルデザイン (UD)で  
大事なことは？

7

ユニバーサルデザインが  
教育とどうつながるの？



8

## 発達障害のある学生の学びのつまずき例

---

- 履修計画を立てることが難しい
- 優先順位をつけることが難しいため、複数のレポートが重なると期日までに提出できない
- 話を聞きながらノートを取るのが困難
- 文字の読み書きに時間がかかる
- レポートをまとめられない
- ディスカッション場面で自分の意見を言い過ぎる

9

## 精神障害のある学生の学びのつまずき例

---

- 不安で時間割を詰めすぎ、学期途中で体調不良になる
- 急激な不安焦燥のため教室にじっとすわってられない
- 教室の入り口から遠い席に座ると不安が高まる
- 多人数の学生の前での発表が困難
- 対人緊張が強く、人の多いところにいると疲れる
- 対人関係や将来等に関する悩みが大きい

10

## 教育のユニバーサルデザイン



ユニバーサルデザインの視点を  
加える

## 教員としての願い

### より多くの学生に

- ①参加して欲しい
- ②感じて欲しい
- ③考えて欲しい
- ④気づいて欲しい
- ⑤変わって欲しい

11

## 各講義に関する学生の意見から

- スライドの文字が読みにくい(小さい)
- 図・表などを見やすく、分かりやすくして欲しい
- 口頭での説明が多かったなので、その内容も資料に記載して欲しい

12

## 学生による授業評価アンケート項目

---

### 【視覚提示】

板書・スライド・資料などが読み取りやすい

13

## 資料作成の際の配慮

---

- 文字の大きさ
- フォント（本資料はUDデジタル教科書体）
- 色（カラーユニバーサルデザイン）
- 視覚情報の配置
- スペース

14



## 各講義に関する学生の意見から

---

- 講義の重要なポイントがどこなのか分かりにくい
- 資料が多すぎて重要な点が分かりにくい

15

## 学生による授業評価アンケート項目

---

【ポイント】 各講義でのポイントが明確に示されている

- ① 説明が分かりやすい
- ② 重要なポイントが分かりやすい
- ③ テストに出るポイントが分かりやすい

16

## 各講義に関する学生の意見から

---

- 身近な例などを積極的に取り入れてほしい
- 興味をひくような工夫をして欲しい

17

## 学生による授業評価アンケート項目

---

### 【興味工夫】

学生にとって興味がわくように工夫している

18

## 各講義に関する学生の意見から

---

毎時間のつながりがわかるようにして欲しい

授業内容と課題がつながらない授業が何回かあった

19

## 各講義に関する学生の意見から

---

- 話すスピードが早い
- 次のスライドに移るのが早すぎる
- ペース配分を工夫して欲しい
- 学生の理解度を確かめて欲しい

20

## 学生による授業評価アンケート項目

---

### 【理解配慮】

この授業では学生の理解度を確認しながら進められている

学び手の視点で

21

國學院大學令和2(2020)年度 学生による授業評価アンケート分析報告書より

---

- 講義内容が課題・課題解説・それ以外で分けられ、受講生が選択できるのが良い
- 録画動画や課題提出フォームをまとめて掲示いただいたので、自分のペースで進められた

個別最適化

22

## ユニバーサルデザイン (UD)で 大事なことは？

- 安全・安心
- わかりやすい
- ポイントがはっきりしている
- 間違いが少なくなる
- さまざまな立場の人にとって(多様性)

見通し

焦点化

視覚化

共有化

興味工夫

個別最適化

23

### 具体的な配慮(1)

- 指示や課題の内容、試験の日程、予定の変更などの重要情報は資料や板書で視覚提示
- 口頭説明を文字資料として挿入
- 明瞭さを心がけ、話すスピードに配慮
- 学生側の聞こえの状況等の確認

24

## 具体的な配慮(2)

---

- 指示を出す際に曖昧な表現を避け明確な表現を使用
- 暗黙のルールやマナーについて言語や文字で明確に伝達
- 話し合う時間やテーマ、発言のルール、役割分担
- 小レポート記入するタイミング等の具体的明示

25

## 授業のユニバーサルデザイン

---

焦点化

視覚化

共有化

26

授業UD  
3つの柱

## 視覚化

- ・思考の  
「見える化」

27

授業UD  
3つの柱

## 焦点化

- ・ねらいを  
絞り込む

着眼点を  
明確にする

28

### 見えることを問う問い

- ・具体的
- ・閉じた問い

+ 関連づけ (R)



### 見えないことを問う問い

- ・抽象的
- ・開かれた問い

29

## 発問の目的

(BCIT Learning and Teaching Centre)

- 学生の既習知識を確認するため
- 学習へ動機づけるため
- 学生が学習内容との個人的なつながりを見出すため
- 学生の思考を促すため
- 教員と学生の間で信頼関係を築くため
- 学生間での学び合いを促すため
- 学習の進み具合を評価するため
- 授業が効果的であったかを評価するため

30



## 共有化

・知識や  
見方・考え方を  
共有する

授業UD  
3つの柱

対話によって

31

## 演習形式の授業における困難 (原田新・枝廣和憲)

1. 対人関係上の苦手さ
2. 曖昧な指示・質問への苦手さ
3. 聴覚情報への苦手さ
4. 柔軟な対応への苦手さ
5. 見通しのない状況への不安・混乱
6. ざわつきへの苦手さ

「大学のアクティブラーニング型授業に対応したユニバーサルデザイン環境に関する一考察」原田新・枝廣和憲, 2017

32

## グループ演習における課題

(原田新・枝廣和憲)

- テーマの本質に関わる質問をすることができない。
- 議論の流れを無視して自分の関心(こだわり)のあることばかり質問してしまう。
- 他の人がしている質問を途中で遮り、自分の意見を話してしまう。

33

## グループ演習における課題

(原田新・枝廣和憲)

- 自分の意見や感想を述べることができない。
- 自分からペアやグループを作ることができない。
- 他の学生の前で発表することができない。
- 相手の質問の意図をくみ取って求められた答えを述べることができない。

34

## 2. 曖昧な指示・質問への苦手さ

- 知識はあったとしても「あなたはどう思いますか」などの漠然とした質問には答えにくい。
- 作業や課題の指示に曖昧な部分があると、どうしたらいいか分からなくなる。

### 【演習における対応】

- 「①と②ではどちらがいいと思いますか」「②の方が①より優れている理由について挙げて下さい」といった、より具体的な質問の仕方をする。
- 何をどうすればいいのか、できるだけ具体的に伝える。

35

## 4. 柔軟な対応への苦手さ

- グループでの話し合いの際、急に話を振られると頭が真っ白になり、答えられない
- グループ活動の中で何らかの作業をするように指示をされても、適切に行動できない。

### 【演習における対応】

事前にグループ内で、行う作業の役割分担を明確しておく。

36

## 5. 見通しのない状況への不安・混乱

主に講義形式の授業において、突然グループ作業をするよう指示されると混乱してしまう。また、いつグループ作業が始まるのかと不安になり、授業に集中できなくなる。

### 【演習での対応】

- 初回授業時に、全体の授業の進め方や流れについてのスケジュールを具体的に教える。
- 毎回の授業の開始時に、その日の授業の進め方や流れについてのスケジュールを具体的に教える。

37



The illustration shows a person with a sad expression and closed eyes, with a vertical black bar labeled 'バリアがある' (There is a barrier) next to them. A speech bubble contains the text: '間違ってはいけないというバリア' (A barrier that says it's not wrong) and '人たちがってはいけないというバリア' (A barrier that says others shouldn't do it). Below the person is a blue box with the text: '安心して自分の意見を示すことのできる場に' (In a place where you can show your opinion with ease).

38



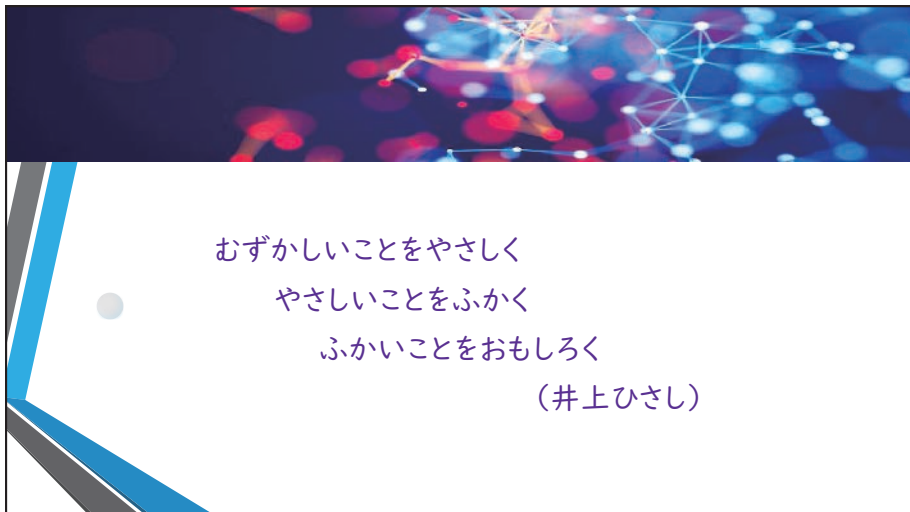
より多くの学生にとって  
わかりやすい、学びやすい  
教育のデザインを目指す

39

國學院大學令和2(2020)年度 学生による授業評価アンケート分析報告書より

- わかりやすい授業で、受けるのが楽しい
- 毎回の課題で理解が深まった
- 質問にも丁寧に対応してくれた
- チャット機能を有効に使い、先生との距離が近かったため、質問をしやすかった
- 質問や感想、課題に対してのフィードバックを毎授業行ってくれる
- 先生が説明に対し具体例や補足を入れ、理解を深めようとしてくれた

40



41

## 参考文献

- 「ユニバーサルデザインの視点を活かした指導と学級づくり」  
柘植雅義編著、2014、金子書房
- 「決定版!授業のユニバーサルデザインと合理的配慮」  
阿部利彦編著、2017、金子書房
- 「授業のユニバーサルデザインvol.12」日本授業UD学会編著、  
2020、東洋館出版社
- 「授業UD研究vol.11」日本授業UD学会、2021

42



教育開発推進機構ブックレット 6

令和4年度 國學院大學FD講演会 講演録

ユニバーサルデザインの視点をいかした高等教育における学びの支援

---

令和5年2月28日 発行

編集・発行者：國學院大學 教育開発推進機構

〒150-8440 東京都渋谷区東四丁目10番28号

電話：03-5466-6744 FAX：03-5466-6742

印刷所：株式会社 明正社